

書 評

栗 原 健 編

『佐藤尚武の面目』

本書「佐藤尚武の面目」は類いまれなる、外交官佐藤尚武の若き国際連盟代表、ソ連大使時代とくに激動期における佐藤を原資料を使って描いた力作である。

編著者の栗原健博士は、外務省外交史料館に奉職され、その間「外務省の百年上・下」、「日本外交年表並主要文書」、「対滿蒙政策史の一面」、「終戦史録」、「天皇―昭和史覚書―」などを執筆された。しかも博士のこれらすべてに出版されたものはいづれも、正確な資料に基き、まとめられたもので外交史を担当する学者はもとより、これ

三 浦 信 行

らにたずさわる専門家にはいずれも不可欠な貴重な作品である。したがって、これら学界に寄与された功績は大なるものである。私事にわたって恐縮にたえないが、私個人としても博士の誠実な人柄と研究に対する取り組み方に対して尊敬している一人である。

博士は、佐藤尚武に敬意を払いながら、多くの貴重な資料をまとめられ、しかも客観性を求め詳細に記述されている。本書は、佐藤尚武の家系（佐藤尚武略年譜、2頁）から説き起し、ソビエト大使としての、終戦までの

ものをまとめたものである。おそらく世界の外交史研究者の多くが確定的な判断を下すことに迷っていた終戦前の日ソ関係が著者の幾多の重要史実（特に佐藤と外相の往復電文に見られるような）が本書によって解明されている。

本書は、三編からなり、これを三人により執筆されている。一は栗原博士であるが、二は海野芳郎氏であり、三は馬場明氏である。とくに栗原博士は「あとがき」にも書いているように、「佐藤大使に多年にわたり、過分の御好誼に与った。そして佐藤大使に心からの敬意を表し、その人格に傾倒しており佐藤への敬慕報恩の気持ちから同大使についての一書を編みたりと思っていたと述懐している（170頁）とある。ここで本書の構成を示すため執筆者ならびに各論文の目次を挙げておく。

目次

一、佐藤尚武の議会演説と終戦意見電報…栗原 健

（一）、はじめに

（二）、外相就任経緯と入閣の四条件

「佐藤尚武の面目」

（三）、議会における平和演説

（四）、議会演説の紛糾と蘆溝橋事件前後

（五）、學生の終戦意見電報

（六）、おわりに

二、国際連盟および軍縮會議と佐藤尚武…海野芳郎

（一）、国際連盟第一回總會と事務局局長就任

（二）、国際連盟軍縮準備委員会に代表として

（三）、ジュネーブ、ロンドン両海軍會議は事務総長として

（四）、連盟における満州事変討議の會議代表として

（五）、ジュネーブ一般軍縮會議に代表として

三、重光、佐藤往復電報にみる戦時日ソ交渉…馬場 明

（一）、北方靜謐の保持

（二）、特使派遣問題

（三）、対ソ施策をめぐる重光、佐藤意見

（四）、中立条約の廃棄

附、外務公務員採用試験合格者（明治、大正年代）

あとがき……栗原 健

本目次からわかるように本書は、佐藤尚武に関する生誕から逝去までのいわゆる一般的な伝記ではなく、佐藤の外交官、大臣としての活躍状況を述べたものである。またこれまでほとんど紹介された事のない、新史料を通して佐藤外交の一側面を見る事が出来る。このような意

味で本書はまさに我々に明らかにされる事の少なかった部分を十分に埋め合せてくれた労作と言える。

ここで編者栗原博士は、「佐藤大使の終戦意見電、特に、昭和二十年七月二十日発、二十一日日本省着、第一四二七号、緊急極秘電報は、私は何度読んだかわからない。そしてその都度、青年時代に習った諸葛孔明の「出師表」に匹敵さるべき不朽の名文章だと思っていると述べている。すなわち、「臣亮言。先帝創業未半、而中道崩殂。今天下三分、益州罷弊。此誠危急存亡之秋也。」に始まり、約六百五十字、「臨表涕泣不知所云。」と結ぶ「出師表」と、縷々四千字、「ただ一片憂国の微衷本使を駆ってこの言をなさしめたるを諒とせられんことを請う。願わくば本使の言が寒心のあまりにいでたる基礎なき謬見に終わらんことを祈願してやまず。」と結び、そして「祖国の興亡この一電にかかると思われ、書き終えて机に伏す。涙滂沱たり。」と記した「終戦意見電」とは、自から良く平仄を一にしている。けれど佐藤

大使の心境は、或いは孔明の心境を越えておったかと思われる。」(12頁)と栗原博士は述べておられ、平和論者、国際協調論者としての佐藤大使の苦衷に満ちた心境を浮きぼりにしている。(尚この電文の全文を後方に載せておく)

次に外相就任と入閣の四条件について、佐藤尚武は、昭和十二年二月に発足した林銑十郎内閣の外務大臣に就任した。しかし就任に先だち佐藤は、林総理、杉山元陸相に対して「これを聞いて下さるなら外務大臣になります」という「入閣四条件」を出している。それは

一、日本外交の基本線はあくまでも平和主義で国際協調主義を堅持すること。

二、中国との紛争を解決するために、平等上の立場に立って談合をとげ、両国の武力的衝突を極力回避すること。

三、対ソ関係においても平和関係を維持し友好裡に諸般の問題解決にしてゆくこと。

四、次第に悪化する対英關係を調整して国交を立て直すと共に、その成果を対米關係にも及ぼすというこの四条件である。（４頁）

この四条件を入れて下さるなら外務大臣に就任すると申出をして林總理、杉山陸相の同感を得て三月三日外務大臣に就任した。これらの事は今日の政治現状からはとうてい考えおよばない事で、佐藤尚武の人間の偉大さを計り知る事が出来る。

次に議会における平和演説において、中国との關係について、昭和十一年日本の華北方面に対する特殊工作、軍事工作が陸軍の主導のもとにすすめられ、それに対して、中国の方は真向から抗日、排日という態度をとって日中關係が危険な状態になっていた。そこで佐藤外相は、前記の四条件にもある、日中關係は平等の立場に立つて、あらためて交渉したいと、大胆率直に述べたため議会内外に波紋を投じた。（５頁）これに対して芦田代議士が質問に立ち、林首相及び杉山陸相、外相の三相の

対支政策が一致しない点を指摘してきた。これに対し、佐藤外相は、「總理及び陸相の答弁と一致していないように見受けると云う御議論でございますが、私は帝国の対支根本方針に付て別段変更の要を認めて居る者ではありません、唯從來のやり口に付て再検討を行いたいと思つて居るのであります、私の所信と總理並に陸相の所言との間には其結果としまして何等不一致の点があるとは存じて居りませぬ、私の考えでは、前内閣の主義若くは原則と云うものは吾々の到達すべき目的を示したものであつて、其目的地に達する迄の行き方は色々あると思ひます、私は其点に重きを置きまして、平等互恵の立場に立つて、支那の心配する所も聴き、又吾々の緊密とする權益に関する主張も十分に聴いて貰つて、最少限の要求に對しましては吾々はより一步も退くことが出来ないと云う立場を執つて進みたいと云う風に思ふのであります。」（８頁）と明解なる答弁をしていたのである。

また外交、国策の根本方針に付いて政府の所見の質問

に對し、＂本当の意味の危機、詰り戦争の勃発と云う意味の危機、日本が之に直面するも、しないも、私は日本自体の考え如何に依って決るのであると云う風に考えるのであります。若し自分が其意味の危機を欲するならば、危機は何時でも参ります。之に反して、日本は危機を欲しない、そう云う危機は全然避けて行きたいと云う氣持であるならば、私は日本の考え一つで其危機は何時でも避ると確信します。私は外交なるものに新奇を銜うことは、大きな間違いだと思ひます。＂（10頁）とその国策の方針を述べている。常識的な外交政策ではあるが、その心は権謀術数をはなれた実に坦々とした、彼の氣持の大きさがここからもうかがい知ることが出来る。しかしこの佐藤外相の發言に對して、＂日本自体の考えによつてきまるなど呑氣なことを言つては困る＂と、国家主義者、強硬論者は、「この發言を取り消せ」という意向を外相に伝えてきた。これに對し佐藤外相は、我然不氣嫌にかられ、「眞實を述べて國民を啓発するのが何故悪い

のか、自分はこれらのことを云わんがために大臣を引き受けたといつてもよい」（11頁）という主旨説明が行われた。まことに高度の見識をもっていなければできないではない。しかし佐藤外相は、林内閣と運命を共にし大臣を辞め、新任の広田外相に引き継ぐ際、佐藤は眞剣に引継ぎを行ったのに、広田の態度は満足すべきものではなかつたと栗原博士に話している。（14頁）

このあと栗原博士は、昭和二十年七月二十日、モスコ―發、佐藤大使の東郷外相あて「最後の終戦意見電」を掲載している。これはソ連大使であつた佐藤が、第九一三号電（強羅會談の意義強調、無条件降伏絶対拒否、特使派遣ソ側回答督促）慎重考量の結果、左に本使の腹藏なき意見申進す。とありますがこの点は最も佐藤大使の外交姿勢ともいうべきものであり、今後の我國の外交政策の決定等に重要と思われるので、すこぶる長文であるが参考のため全文を引用する。

一、アメリカ機動部隊は七月十四日以来本州北部海面

に行動を開始し釜石、室蘭、水戸地方に接岸し艦砲射撃を加え、その艦載機は本土、北海道間の連絡を妨害し多数の船舶を撃沈したりと伝えられ、これにたいするわが方邀撃は敵側報道によれば海空軍とも皆無に近しとのことにて、右は遺憾ながらわが方抗戦力の低下を如実に物語るものと考えられ、この趨勢をもつてすれば敵艦隊の行動は日を追うて傍若無人となるべく、現に今回来襲機動部隊の構成艦名ならびに司令官の姓名まで麗々と放送し公然日本海軍に挑戦しおれり。

二、他方マリアナ、沖縄および硫黄島方面の基地よりする敵空軍の来襲もほとんど連日、本土各地に及び、大都市はすでに廃墟と化し軍需生産施設、貯油所などのほか、小中都市まで爆撃の手伸びきたり、逐次炎上壊滅を見つつあり、しかしてこれにたいするわが方防空措置もあるごとく、制空権もまた敵の手に委し去りたるものと判断せざるをえず。

三、一度制空権を敵手に奪われたる後のわが方戦力は加速度をもって降下することドイツの例に徴するも明らかなり。しかしていったん敵手に委したる場合、制空権を取り戻すは外部よりの援助をなくしてはほとんど困難にして帝国としては満州内の航空機大量生産を望むほか、救い手なきしだいなるも、これとて発達日なお浅き満州産業にいくばくの期待をかけうべきや確信を有し難きのみならず、その満州国すら近く沖縄よりする大爆撃の好餌たらんとしつつあり。

四、本使はもとより敵の本土上陸のことありや否やを知らずといえども、またそのことなかるべきを断言するだけの確信を持ち合わさず、敵のレイテ、フィリピン上陸作戦の徹底ぶりをもってすれば地理的条件の相違あるもむしろ上陸を覚悟するを要すべきを信ず。しかして上陸決行の日ありとせば、それはわが抗戦力を徹底的に壊滅せしめたる後のことたるべきことまた明らかなり。わが抗戦力打倒のためには敵は直接軍事施設生産設備の破

壊、都市爆撃などのほか、国民生活力の剝奪に力を注ぐべく、今秋の收穫がわが戦力にいかに大なる關係を有するやにつき熟知しおるべければ、收穫時にさいし收穫物の破壊を試むこと絶無なるを期せず。たとえば全国にわたり実たる稻田の乾燥期を見きわめ一挙にこれを焼却するごとき方法を案出すること敵側にとりては不可能事にあらざるべく、また彼らとしては当然、つけ込むべきわが方の弱点とすべし。今秋の收穫を失わば我は絶対的危機にひんしたちどころに戦争継続不能に陥るべし。すでに制空権を奪われたる帝国は右の事態にたいし何ら手の施すべきものなく敵のなすがままに委せざるをえざるべし。

五、本使は抗戦力壊滅してなお戦争を継続するをもつて不可能事となすものなることすでに往電第一一四三号にても申進したところなり。しかるに皇軍はさらなり、全国民もまた至上命令無き限り敵の軍門に下るをがえんぜざるべく文字どおり最後の一人となるまで矛を捨

てざるべし。さりながら敵の絶対優勢なる爆撃砲火のもと、すでに抗戦力を失いたる將兵およびわが国民が全部戦死を遂げたりとも、ために社稷は救わるべくもあらず。七千万の民草枯れて上ご一人ご安泰なるをうべきや。思うてここにいたれば、個人の立場も軍の名譽もはたまた国民としての自負心も社稷には代え難し。すなわち我は早きに及んで講和提唱の決意を固むるほかなしというに帰着す。

六、講和提唱は貴電第八九三号の特派使節によりモスクワにおいてなさるるを最も至当とすと本使は考えたり。しかるに特使差遣は不幸ソ連の拒否に会い（往電一四一七号）たるにより、何等他の弁法案出の要に迫れり。しかししていったん講和決すれば、その結果日本国民は苛酷の条件甘受のこととなるは避け難きところなるも、その覚悟をもってできうる限り短時間内に彼我軍部代表者により停戦協定を了し、このうえの犠牲を取りやめしむべし。講和提議に当たり、わが方の留保かつ力説を要す

るは国体擁護の件にして右はわが方絶対の要求として相手方に強く印象を与えるを要すべきは往電一四一六号にて申進したところなり。

本問題については、国体保持の問題は国内問題なりとして講和条件より除外することもあるいは一方法とすべきか。ただしその場合にはいきおい国内において憲法会議のごときものを招集し、形式的にも民衆の声を聞く体裁をなすを要すべく、しかして本会議には極左党のごとき国体護持に公然反対を唱うるもの皆無なるを期し難く、また憲法会議招集それ自身わが憲法に抵触することとなるべきも、非常事態に対処せんとするものれば違憲の非難にたいしては何ら適當なる解決を与えるべきも要すべし。他方この形式のもとに国体問題を解決することとせば、あるいは案外、敵側の同意を得ること容易となるやも計り難し。しかして国民の総意をもって皇室推戴を決議せばわが国体は世界的にも、かえって重きを加えるものとなるべし。

七、本使のいわんとする講和提唱は、国体擁護以外の敵側条件をたいていのところまで容認せんとするを意味するものにして、国体保持さえ成れば国家の名誉と存立はもはや最小限度保障せらるるわけにて、貴電第九一三号の二のご趣旨にもとらざるべきを信ず（往電第一四一六号参照）

八、いまや帝国はまさに文字どおり興亡の岐路に立てり。このまま抗戦を続行せんか、国民は尽忠報国の誠を尽くし安んじて瞑すべきも国そのものは滅亡にひんすべし。最後まで大東亜戦の大義名分に忠実なるは可なるも社稷を滅ぼしてなお名分を明らかにせんとするは無意味にして、国家の存立はあらゆる犠牲を忍びてもこれを護持せざるべからず。

満州事変以来日本は権道を踏みきたり大東亜戦にいたりてついに自己の力以上の大戦に突入せり。その結果いまや本州さえじゅうりんせられんとする危険に直面しもはや確たる成算なきにいたれる以上、早きに及んで決意

し千戈を収めて国家国民を救うこと為政家の責務なるを信ず。もちろんすでに和義を求むる以上、講和条件のいかなるものなりやはドイツの例より見ては察知せらるるところにして国民は長期にわたり敵国の重圧にあえがざるをえず。しかしながら国家の命脈はこれによりて継がるべく、かくして数十年の後再び以前の繁栄を回復するをうべけん。政府もまさにこの道を選ぶべく、かくして一日も早く、聖上のご軫念を安んじ奉らんことを、切願してやまず。

戦争終結の暁には国内各方面に徹底したる改革を施し、一般政治を民衆化し官僚の跋扈独善を排して、真に君民一如の実をめぐるに努むるを要すべく、また満州事変以前よりあまりにも外交を軽侮し、国際関係に無頓ちやくなりしことがすなわち今日の災いを招きたる原因なり。（傍点―三浦）かつまた戦後の日本は常時国際関係の風波にもまれながら活路を見いだすの困難に遭遇すべきに想到し、将来外政に重点をおく底の最善の政治組

織を採用するを緊要とすと認む。

防共協定以来のわが対外政策は完全に破綻せり。ナチズムにくみして世界を枢軸、反枢軸の二勢力に分かちたることがそもその起こりにして、この過誤は将来にたいし明確に認識し外交政策の根本的建て直しをなすを必要とすべし。

九、宣戦の大詔を拝したる以上戦争目的完遂に全力を傾倒すべきは全国民当然の責務にして本使もまた、しかく心得微力をいたすに努めたり。しかれどもことすでに今日の情勢となるにいたりて本使は率直に今次戦争の将来絶望となりたる事実を認識するを要すとなすものなり。

敵本土に上陸したらば全力をあげて反撃し米英をして攻めあぐましむべしとする論、傾聴に値し、またわれわれの戦力いまなお敵に相当の打撃を与えうべきことも、政府軍部の確信せらるるところなるを信ぜんとす（貴電第九一三のご回訓の二）。しかれども右は我におい

て制空権制海権を喪失せざる以前のことならば、本使もまたこれに望みをつなぎえたるべきも、いかんせん今日においてはすでに敵海空軍の連日にわたる来襲を撃退しえざる状況に陥り生産施設関係次々と破壊せられゆく現状とするにおいて、さらにまたこの状況は日を経るにしたがい一層迅速に発展していくべきを思うとき、いかにわが軍民勇戦敢闘を繰り返すうち、ついに力尽き刃を捨てゐるのやむなきにいたりたる時機には、すでに全国土は敵軍のじゅうりんするところとなり、国家の主権も占領国の手に移るべきことドイツの先例の示すごとくなり。

本使はもはや前途目的達成の望みなく、わずかに過去の情勢をもって抵抗を続けおる現状をすみやかに終止し、すでに互角の立場にあらずして無益に死地につかんとする幾十万の人命をつなぎ、もって国家滅亡の一步前においてこれを食い止め七千万同胞をとたんの苦より救い、民族の生存を保持せんことをのみ念願す。

本使は政府のご所信に反するを知りつつ、あえてこの

言を呈するものにして、その罪甚大なるを自認す。しかもなお、この挙にいずれゆえんのは、救国唯一の方策が卑見のごとくならざるをえずと信ずるがゆえにして、たとえこれがため本使は敗戦主義者をもって非難せらるるも、これを甘受すべきにより、いかなる責任に問わるもつつしんでお受けすべきことを申し添ゆ。

以上をもって本使は忌憚なき所信を吐露するをえたり。このうえはもはや反復することをなさざるべく、ただ一片憂国の微衷本使を駆ってこの言をなさしめたるを諒とせられんことを請う。願わくば本使の言が寒心のあまりにいでたる基礎なき謬見に終らんことを祈願してやまず。」と述べている。

そして「この電報の起草には、私は私なりに、心血を注いで筆をとったものであり、一項をしたためては筆をおき沈思黙考、さらにまた一項を書きおろすというぐあいでは重い筆を走らせたのであった。祖国の興亡この一電にかかるとさえ思われ、書き終えて机に伏す。涙滂沱た

り。」と佐藤大使は、「回顧八十年」に誌しています。

(21頁)

かなり長い引用であつたが、これこそ、著者である栗原博士が佐藤尚武の人間性、国家に対する責任感等を特に強調したい所ではなかつたのではないか。しかも戦時という特殊な常態において、国内にいた関係者ならだれでもしつていた事と思うが、佐藤大使は国外にあり、公然と政府に反対意見を申し上げたのである。それにしてもこのように決然と反対意見をのべる事は、よい事ではなく、国家の運命を高い見知から判断し、それを進言した勇氣は佐藤尚武の人間性をありありと浮び出させている。この中心いかばかりか察してもあまりあるものがあり、著者を通して外交の真髓を浮きぼりにされている。

また著者は、佐藤大使が昭和二十一年五月にソ連抑留から帰朝し、天皇陛下に帰朝の報告を行ったことにふれている。「帰朝直後報告にいったが、数日たつて宮中よ

り呼び出しがあり陛下に拝謁することになったのである。佐藤大使は、私は深く頭を垂れて陛下のお話を伺った。お話の内容は、私から口外することは許されない。私は、お話の次第を深く心に秘めて、ただおそれおいという感激のうちに陛下にお礼申し上げ、ご前を退下したのであつた」。ここで著者の栗原博士は、陛下より、如何なるお話があつたのか、出来得ることなら、佐藤さんから、もう少し詳しくその話を伺いたかつたのであるが、それは永久に出来なくなつた。宮中の大金益次郎侍従長のメモがいつか発表されるまで、歴史の年月を待たねばならなくなつたと述べている。この佐藤尚武と天皇がいかなる話をされたのか、今後読者に大いなる興味のある所である。

次に国際連盟および軍縮會議と佐藤尚武について、外務省外交史料館の海野芳郎氏が書かれている。海野氏の著書には、「国際連盟と日本」「外務省の百年上・下」(共編)「国際連盟の対イタリア經濟制裁——イタリア・エ

チオピア戦争における——」その他多くの論文がある。

著者は、はじめに佐藤尚武の国際連盟での活躍状況の前に、国際連盟の誕生から成長期に転じた過程に触れている。

スイスの公使館一等書記官であった佐藤は三十八歳の壮年外交官として国際連盟の活動にふれたのは一九二〇年一月でしかも第一回総会がジュネーブで開催された。ここで佐藤は電信課長に就任する。佐藤は「国際連盟などでは全くわけのわからぬものであり、かつまたわかりたいという興味も感じなかった」。そこで会議中は、「わずかに電信課長の仕事だけを、忠実につとめたにすぎなかった」と述懐した(30頁) 血気にはやる若手外交官の佐藤には、国際連盟に自からの運命を託す気持にはどうしてもなれなかったらしい。

一九二三年八月佐藤はポーランド公使に発令されたが、一九二六年一〇月二三日には連盟の、軍備縮小会議準備委員会の代表委員を仰せつけられた。佐藤が国際連

盟事務局の事務局長の辞令を手にしたのは一九二七年一月一日であった。(32頁)

また軍縮問題でソ連案が提出され、佐藤はソ連案を批評して満場の喝采を博した。彼は実地論と法律論からソ連案を反駁した。しかしソ連もこれに対して反駁してきた。会場は重苦しい空気になった。この時佐藤は発言を求めた。いわゆる大国の一としていたずらに尻ごみし、ソ連の輕視を招くは好ましくらず、この際、日本の態度を表明することこそ、将来の立場を容易ならしめるゆえンである……と。それは後年、百戦錬磨の各国代表を相手に、堂々と勝負をいどんでいった佐藤の武士道外交にはかならなかつたと指摘している。(41頁) まことにその人柄が現われている。

つぎに、「重光・佐藤往復電報にみる戦時日ソ交渉」について国学院大学助教授の馬場明氏が書いている。馬場氏の研究論文等には、「満州事変と奉天総領事」、「臨城事件と日本の対中国政策」、「興亜院設置問題と宇垣一

成等がある。佐藤尚武は昭和一七年二月二八日駐ソ大使に任ぜられ三月一三日モスクワ赴任の途についた。ソ連大使として着任から二一年五月の帰国までの駐ソ大使時代を執筆するに当て佐藤の手下には十分の資料がなかった。というのは、ソ連の対日参戦を通告された八月八日、モスクワの日本大使館では、保管しているすべての重要発受電報を焼却した。これには佐藤自身の執筆にかかる数多くの重要電報も含まれていた。(86頁)佐藤が本省では保有していると信じていたこれらの電報が焼却されていたからである。かろうじて全部ではないが、「重要な電信」を外交顧問の本多熊太郎が持っていた。したがって著者の重光・佐藤の往復電報にみる戦時日ソ交渉のものは「本多記録」によるものと、外務省の電信課長が自分の手下に保管してあったものである。

佐藤は大使に就任し、出発前首相東条に会見し確認をしており戦争終結に導くためにも「南方における不敗の態勢を築くことは絶対必要なことであり」、日ソ関係は

「中立条約一点張りでないかなければならぬと覚悟を決めた」のであった。(87頁)

また対ソ施策に関する重光を含む政府さらには軍部意見と佐藤意見の根本的な相違があり、駐ソ大使更送問題ともからんでいたのである。(106頁)

佐藤・重光の対ソ施策をめぐる佐藤大使の第二三一号(緊急、館長符号)、対蘇政策に関する意見として十項目にわたり電報してきている。その中で六項に「外交ニハ相手アリ実力ヲ以テ相手ト戦フ戦争に於テスラ我ニ不利ナル形勢ヲ招キタリ況ンヤ実力ヲ用ヒス利害関係ノミヲ以テ連衡スル国際関係ニ於テ戦争以上ノ成果ヲ収ムルコト難キハ已ムヲ得サル所ナリ」とあり八項目に「要スルニ大東亜戦モ大同同志ノ角逐ナル以上我モ亦強大国トシテ終リヲ全フスヘシ南方地方ヲ戦禍ノ巷トシ我ハ蘇聊ニ対シ見苦シキ讓歩ヲ敢テシ我ノミ生キ伸ントスル如キ態度ハ大国トシテ恥サルヲ得ス緬甸、「タイ」等ヨリモ失望ト嘲リヨ以テヘ迎ラルルハ到底忍ヒ得サル所ナリ」

(22頁)とあり、また二月一七日佐藤は一時間一五分にわたりモロトフと会談し意見を交換し、その応答振りを詳細に報告した。(123頁)その会談要旨が述べられている。

またソ連の東方ニ於ける地位に付テの觀察について四項目からなる電文を送っている。(128頁)

対蘇施策ニ関スル件につき第一六九九号で重光は佐藤へ一層の努力を促している。しかし佐藤の見解は重光のそれとは全く異なるものであった。「現下ノ戦況ヲ基礎トシテ日蘇関係ノ将来に付検討ヲ加ヘタル」一月二七日発重光宛佐藤意見書はすこぶる長文のものである。(132頁)

また日ソ中立条約の廃棄に対してであるが、昭和二〇年一月三日佐藤はクレムリンに赴き一時間に亘りモロトフと会談、ソ連の対外政策につき種々打診を試みたが、モロトフはソ連の自主性を強調し、大国としてそれがむしろ当然であるとの様子さえ示したことから目下のところ当分はソ連の対日態度に変化を来たすこともないであ

ろうと判断した(140頁)とある。

この会談により、佐藤は中立条約効力延長に関するわが方がソ連側に対しいかなる手を打つべきかの方法論に二つの立場を出している。その(1)は条約を自動的に延期せしめる方法。(2)はソ連側に条約的存続の希望を伝へ同調さす事の二案である。(141頁)これとは別問題として、「茲ニ根本論トシテ本使ノ特ニ主張シタキ儀に現下世界情勢下ニ於テ日ソ関係ヲ増進スル方途トシテハ中立条約存続以外ニ途ナキト同時ニ之以上ニハ絶対ニ出テ得サルコトニシテ本使トシテハ屢次ノ意見申進中ニ繰返シ申述ベタル通り最少限ノ本条約存続ヲ実現シ之ヲ以テ蘇聯ヲ引き着ケ英米側ニ全面的ニ奔ルコトナキヤウ措置スルヲ以テ根本義ト為スモノナリ」とありスターリンは対米英関係の現実政策上日ソ中立条約の廃棄ならびに対日戦を決意していると考えられる節があるというのであった。(森島発、重光宛)(144頁)

このように中立条約をめぐる佐藤大使がソ連の状況

をモロトフとの会談等を通じその感触を対日ソ間の問題を佐藤、重光の電文で詳細に指摘している。当時の激変する世界のなかで、相手の出方をいちはやく察知し対ソ試案を作成し、重光の意見を求めている。

また四月五日、中立条約問題に関するソ連政府の回答がなされ、佐藤に対しモロトフは、ロシアの声明文を読みあげ佐藤に手交した。

すなわち「中立条約当時ハ未タ蘇独戦争並ニ日本ノ対米戦争開始前ノコトナリシ処其ノ後情勢ニ根本的变化ヲ来シ独蘇戦争開始セラレ日本ハ又独ノ同盟国トシテ同国ノ対蘇戦争ヲ援助セルノミナラズ日本ハ蘇聯ノ同盟国タル米英ト戦ヒツツアリ斯ノ如キ情勢ノ下ニ於テ中立条約ハ基ノ意義ヲ失ヒ其ノ存続不能トナレリ依テ「ソヴィエト」政府ハ同条約第三条ニ依リ茲ニ日本政府ニ対シ同条約廃棄ノ意思ヲ通知ス」(148頁)とあり、これに対し、佐藤は、ソ連政府の快定を遺憾とする旨モロトフに伝達、またはげしい応酬が行われそのやりとりが詳細に述べられ

ている。(149頁)

最後に、本書「佐藤尚武の面目」が学術研究奨励基金(財団法人吉田茂記念事業団)による褒賞「吉田賞」が昭和五十七年二月十七日選考委員会が開催され本書に快定された。贈呈式は三月四日行われるが、編者である栗原博士より評者のもとにその快定したことをお知らせいただいた。この吉田茂記念事業団の目的は「故吉田茂の偉業を記念して、大正、昭和のわが国の内政・外交に関する研究の奨励援助等を行ない、わが国の学術の振興と文化の向上に寄よし、国民の精神の作興と平和思想の普及に資することを目的とする」ものである。(選考委員は堀江董雄、松本重治、東畑精一、横田喜三郎)以上本書を読了して感想を申しのべてきましたが、果してどこまでその正鵠を得ているか、もし失礼があったらお許しいただきたい。(原書房刊、一七六ページ、一九〇〇円)

日本政教研究所記事及び学会報告

第一三回研究会

日時 昭和五六年一月三一日

報告者及びテーマ

佐藤 尋生 講師

「(資料紹介) 本居宣長自筆『古事記伝』完全復刻版について」

第一四回研究会

日時 昭和五六年四月二五日

報告者及びテーマ

三浦 信行 助教授

「北方領土についてのソ連の主張」

——ソ連人の思考と論理——

第一五回研究会

日時 昭和五六年六月六日

報告者及びテーマ

日本政教研究所記事

日本政教研究所記事

宮内邦子（防衛研修所々員）

「ソ連の軍事思想」

第一六回研究会

日時 昭和五六年六月二七日

報告者及びテーマ

池田十吾講師

「動きだしたレーガン外交」

―極東政策をめぐって―

第一七回研究会

日時 昭和五六年七月一四日

報告者及びテーマ

大石泰彦（東京大学教授）

「経済政策と価値判断」

第一八回研究会

日時 昭和五六年一〇月三日

報告者及びテーマ

佐藤尋生講師

「アジア中進工業国の台頭」

―特に韓国の工業化過程を中心として―

第一九回研究会

日時 昭和五六年一〇月三一日

報告者及びテーマ

三浦信行助教授

「行財制改革の展望」

第二〇回研究会

日時 昭和五六年一二月一九日

報告者及びテーマ

山田昭二教授

「古代東西文化交流の可能性」

第二一回研究会

日時 昭和五七年一月二二日

報告者及びテーマ

水口修成講師

「ミッテラン政権とその政治路線」

日本政教研究所記事

ーフランス社会党の基本政策を中心としてー

第二二回研究会

日時 昭和五七年二月二〇日

報告者及びテーマ

山崎太喜男（国際問題研究家）

「戦域核の諸問題」

学会報告

昭和五六年度秋季国際政治学会研究大会

日時 昭和五六年一〇月二五日

場所 関西学院大学

報告者 水口修成（国士舘大学日本政教研究所講師）

テーマ

「フランスにおける東南アジア難民問題とその関連のNGOについて」

ーフランス政治文化とのかかわり中においてー